

義父と魚周

義父パート1

義父が他界して丸 2 年が経過した。義父の現役中は、仕事上で何度も衝突しながら競う様に働いた。何で衝突したか記憶が鮮明ではない。義父に言われた小言を今では自分が子供に言っている。気恥ずかしい思いと同時に義父の足跡を顧みる事がある。後継ぎを託された兄達が岐阜商業を卒業されたのに比べ、3 男の気楽さなのか岐阜工業に進学した。明治 28 年の下関条約で獲得した日本の植民地の台湾では、大正 9 年から土木技師の八田与一が干ばつと塩害が繰返される荒野の様な嘉南平原を農地にする為に 10 年の歳月を要した大規模な土木工事が行われた。嘉南農民に豊かな水と当時の金額で 1 億円近い農産物が出来る迄になった。義父は、今でも台湾人に尊敬される八田与一に憧れ、台湾総督府に就職して、上下水道や給排水路の土木工事に邁進した。戦争が激しくなり、幹部候補生に志願して戦車兵となり満州に赴くが、昭和 16 年に結ばれた日ソ中立条約を破ったソ連の突然の参戦により奉天に撤退命令が下り、武装解除されて厳寒の地のシベリアに抑留された。シベリア鉄道建設の為、過酷な労働条件の下で軽度の肺炎を患い、体力を 5 段階に分けられた中で上位から 3 番目に評価された。4・5 番の方は、航海中に亡くられる事が心配されたので、抑留された中では一番早い帰国が出来た。荒波を超えてたどり着いた舞鶴港に岸壁の母では無いが、従兄のマルシゲさんが迎へに行って下さった。

義父パート2

ガタルカナル島と沖縄と先の大戦で最も激しい戦いの場で 2 人の子供を無くした祖父達は、痩せ細った体で帰国した義父の体中を撫で回す様に、万感の思いで迎えた。徐々に体も回復し、幸か不幸か土木を諦め、兄達に代わりイサバヤ魚周商店を継ぐ羽目に成った。昭和 23 年に結婚をして、私と義父の様に祖父と衝突しながら岐阜工業で学んだ合理的な経営に努めた。祖父は、名うての艶福家で私が知る限りでも、3 人の腹違いの兄弟がいた。結局、家業を義父に任せて若いお妾さんと家を出て行ってしまった。所が年末に、従業員と一緒にワイワイ餅をつく慣わしにヒョッコリと参加した。つき立ての餅を持ってイソイソお妾さんの所へ帰途に着いた。鉄から竹に替った太田橋の欄干から滑落してしまった。義父は、正月早々から毎日の様に川浴いを捜し歩いたが見つかる事が出来なかった。3 ヶ月ほど経過した大雨の日に祖父は坂祝の岩に打ち上げられた。無残な父親の死体に遭遇して、優しかった兄達の戦死の姿と重なり涙に明け暮れた。それでも私達夫婦が風邪で仕事を休んだ経験が無い様に義父達も日々の仕事に追いまくられ、それがひいては、悲しみを仕事が忘れさせてくれた。

義父と魚周

義父パート3

私が生れた昭和26年には、戦車の操縦の経験を生かして自動車の運転免許を取得して、山県郡の吊るし柿や南濃で蓮根をトラックいっぱい仕入れ加茂郡の八百屋さん達にも卸し、先代に負けない様な商売の隆盛をさせた。昭和32年ごろから始まった学校給食の食材の納入も八百屋組合として積極的に参加した。魚周商店の未来も磐石に思えたが、アメリカで石鹸を貨車ごと仕入れ問屋機能を省くスーパーマーケットの商法がダイエーや地元では名鉄ストアに主婦の店等日本にも徐々に浸透始めた。岐阜県では、ヤナゲンにタマコシが八百屋から始まった如く、義父もこの地でいち早くスーパーへの転進を図った。国民的にも農業から工場への労働環境が変化し始めた。婦人の社会進出は、日曜営業の希望が言われ始めた。当時は、八百屋組合の規律が厳しく制限されており、日曜日営業や安売りに特に同業者から極めて厳しい反発を受けてしまい。自身が組合長を努める八百屋組合から、全会員が抜け出し新しい組合を設立された。飼犬にかまれた様に学校給食からも締め出されてしまった。

義父パート4

4代目の店長が生れた頃まで続いた古井の市場があった。昭和40年頃の最盛期には、売上規模も1億円を超えていた。30年代は、まだ車が珍しい時代で近隣の農業関係者は、一番近くの古井の市場にリヤカーで農産物を運んでいた。当時は、役所や会社が不正を起こすなど信じる者が無い時代だと言える。八百屋さんも忙しさのあまり、セリの値段を頭に記憶するばかりで記帳する人など皆無であった。戦後間もなく迄、税務署の納税額の評価は、店の間口で決められていた事に反発を感じた義父は、空ダンボールの売上まで雑収入に記帳するほど徹底的な複式簿記の事務処理をした。岐阜工業出身のエリート意識もあり、正確な仕入れ台帳の記帳に心掛けた。結果的にセリの値段と請求違いが頻繁にある事に気づいた。生産者の情報も集め、当時は、学校にしか無かったテープレコーダーまで買い不正な事務処理を暴き、古井市場の社長に就任した。経理問題や地主とのトラブルなど裁判を繰り返すうち、正義感が前に出て、地元の八百屋さん達と距離を置く様になり、孤高な人格が作られてきた。

義父パート5

義理の妹が結婚した。お相手は、私の竹馬の友で喧嘩相手だ。彼は、測量や開発の仕事をしていて、義父の土木の虫が騒ぎ出した。東京オリンピックが開催される前後から日本中で土木工事が行われた。当店の周辺も国道41号線の工事が急ピッチに進められた。闇雲な開発もあり、道路の付け替えや共有地が残された。義父は、義弟と測量を始め、共有地に10件以上あったの住宅毎の分筆をやったのけた。又、花堅墓地が低地にある為、雨が降ればぬかるみ、無計画に出来上がった区割りの為、他人様の墓地を通らなければならない事態の解

義父と魚周

消に運営規則を作成し、其々の墓地の利用者に人が歩ける程度まで引き下がって頂いて、コンクリートの道に尽力した。義父が今の私の年齢になる頃、古井神社の氏子総代に選ばれた。古井神社は、極めて長い歴史があり、氏子総代の仕事も結構多かった様だ。取り分けお賽銭の勘定も大変だった為、銀行を利用する事の提案から始めた。やがて伊勢神宮に参拝するバス会社からのリベート等会計処理に疑問を抱き、定款の作成を実行した。又、下古井と上古井と祭りの行列の順序と使われる高張り提灯や杖の長さが年によっても違う事に気付き、上古井と下古井が同じ仕様にする為に現在でも当元から重宝がられている祭りの本の作成を考え、ハイオウの着替えの写真を写しから、行列の図や式典の順序を書き、心血努力した。

義父パート6

私が会長を拝命する可茂食品衛生協会の 50 周年記念がシティホテルで盛大に行なわれた。50 年のうち義父が当初から 40 年と私が 10 年の二人で半世紀係った事になる。2002 年に施設の岐阜県知事表彰を賜り、2004 年には、岐阜県大会を経て、全国食品指導員大会で東海地区代表として、義父を中心とした指導員の苦勞話を発表して晴の金バッヂを授かった。義父からの継続した役に遺族会もある。毎年、清掃される平和の塔には 242 名の英霊が刻まれています。義父は、直ぐ上のお兄さんを特別に慕っていたようで何度も話を聞かされた。沖縄戦では、鉄の暴風と恐れられた艦砲射撃 60 万発、大砲の砲撃 200 万発を受けて、沖縄の地形が変わったとさえ言われる。沖縄で戦死された伯父さんは、岐阜商業の相撲部の主将として活躍されていた。私の次男は、最近有名になった海老蔵と似ていると言われる。仏間に飾られる遺影は次男とよく似ている様に思う。伯父さんは、文武両道に秀でて、将来を嘱望されておられた。家業を発展させたい、結婚もしたい。そんな夢もかなう事無く、残念ながら終戦も押し迫る 6 月に、沖縄第 2 高女の生徒さん達と名も無い洞窟で最期を遂げられた。

義父パート7

義父は、毎年の様に沖縄で開催される慰霊祭に出かけた。義父の兄は岐阜商業で学んだ事を生かされて、軍の医療事務を担当されていた。勤務されていた病院は破壊され、野戦病院化した中で、佐合少尉と行動を共にされた元第 2 高女の真栄田みよ子さんに話を聞く事が出来る様に成った。学校職員に引率された有名なひめ百合部隊に対して、第 2 高女の 4 年生の生徒たちは、軍に直接配属された看護隊でした。別名で白梅部隊と言われ、傷病兵の看護や水汲みの任務をされました。米国の総攻撃により、自決を含めて 46 名中 22 名の死者を出し、学生でありながらも戦死者とされた。旧日本軍に隠蔽された秘話とされている。私達夫婦は、慰霊祭に一度も出かける事が出来なかったが、あたかも伯父さんが呼び寄せる様に今年、女房の甥が沖縄で結婚式を挙げる事になり、式に参列した後、義父がお世話になった真栄田みよ子さんにお会いする事が出来、伯父さんが亡くなられたと言われる洞窟にも親切に

義父と魚周

案内をして貰い、岐阜県の慰霊碑にお参りする事ができた。義父は、年賀状のやり取りに、毎年開催される慰霊祭には、元白梅部隊の方々に僅かばかりではあるが供物料を送っていた。

義父パート8

義父の生れた大正 13 年の前年に関東大震災が起き、企業や商店が大きな被害を受けた為、銀行の融資が回収不能になった。加えて、若槻内閣の片岡大臣が東京渡辺銀行を破綻したと宣言したことから、取り付き騒ぎが全国に波及した。現在、元亀井大臣が行なったモラトリアムがこの時も実施され、表面上は終息した。昭和 5 年に金解禁を行ない、世界的に円の信頼が高まった。折悪しく、ウォール街の株価暴落に端を発した世界大恐慌の荒波により、古井町では、315 戸の商店が 175 戸とおよそ半減した。また、農家でも恐慌による農産物の価格の低落と災害に見舞われた。相次ぐ恐慌の影響で街に失業者が溢れた。「大学は出たけれど仕事が無い」が流行った。どん底景気の昭和元年に魚周商店は、創業された。創業者の祖父は、今も事務所で使用いる立机を購入し、店の 2 階には漆喰張りの天井の結婚式場を併設したモダンな人柄だったと聞く。義父は、私生活では軽蔑しながらも祖父と同じ机を注文して自分の書斎に置いた。又、祖父の買い入れた物を捨てる事が出来ずに今日に至る。

義父パート9

シティホテルが開業した年に、義父にどこか似た夫婦連れの来客があった。事務所に案内すると義父の顔が一瞬、青ざめた様子だった。暫らく歓談した後、高山へ紅葉狩りに出かけた。シティホテルに宿泊した翌日、大島紬を土産に持たれて私達夫婦にも挨拶して帰途に疲れた。後日、義父から聞く所によると、祖父が認知した異母兄弟だった。名古屋への空襲が激しくなり、母子は、実家の前橋に移り住んでいた。祖父が亡くなり義父は、相続の話に前橋に向いた。母子の実家は、機織工場を経営され何の文句も言わず 1 つ返事で財産放棄をされた。その後、機織の景気が悪くなり、祖父を恨む時期も有ったと聞く。母子は、必死に頑張り抜き、子供さんが東京大学を卒業後、一流企業に就職されて、安心した所で弊家に来訪された。4 年前には、やはり義父と似た顔の老人が訪れた。聞けば、生後れて間もなく養子に出された異母兄弟だった。最近、連続して家族に不孝が続いた為、八卦見に見てもらわれた所、先祖の墓参りをしない事が原因と言われ、思い切って来られた。義父は仏壇に案内して、お墓にも手を合わせてもらった。私には、まるでテレビドラマを見ている様な話の連続劇場だ。

義父と魚周

義父パート10

義父の生れた翌年の大正14年の加藤高明内閣が、女性を除いた普通選挙が実施した。戦後靴下と女性が強くなったと言われる様に婦人に参政権が付与されたのは戦後からだ。祖父が我がまま出来たのは、戦争に男子が駆り出されたのと男尊女卑の時代だったかもしれない。戦争や時代に翻弄されつつも魚周商店は、四代に渡り女性の力が店を支えて来た様に思える。竹を割ったような性格で、左手でパン粉を付けながら、右手でコロッケを揚げた祖母と負けん気の強さと職人に代わり、1日に結婚式の仕出し料理を3度もやりきった器用な義母とハチャメチャな私を上手に操縦する妻がいる。4代目の嫁は、剣道で愛知県の国体選手だ。夫婦喧嘩をしても結果は明らかに見える。義父や戦死された伯父さん達大勢の先祖からの命を引き継いで、妻や子供の存在がある。自分は又、子孫達に店と命をリレーしていく存在だと思う。私の苗字が佐合と知らないで魚周と呼ばれる人達がいる。個人と店が同一視され、幸せを感じる。儲けと言う字は、信じる者と書かれる。信者を増やす事が地域と店の発展と思う。この先、何度かの祭祀を努めながら、家族の絆を深める努力を重ねるつもりでいる。